

Camp

Data Book 2005

キャンプがわかる!



キャンプが人を育てます。

キャンプは遊び。
人生に必要なことが
でもたくさん学べる遊びです。



自然そのものが もたらしてくれる学び

自然の中は、人間の五感に働きかける不思議な刺激に満ちています。これらの刺激は、私たちに感動や驚きを与え、知的好奇心や探究心を喚起させてくれます。そして、直接実物を見たり聞いたり、触れたりする体験は、知識を本当の意味での知識として定着させることに役立ちます。

集団による活動・共同生活が もたらしてくれる学び

キャンプの小グループでの生活や活動では、一人ひとりが自主的・主体的に行動し協調性のある態度や行動をとることが求められます。キャンプは、他者との深い交流の中で信頼感を育てより良い人間関係のあり方を学ぶ機会を提供してくれます。

自然の中での生活や活動が もたらしてくれる学び

自然に対する理解は、日常生活における環境保全や自然愛護への積極的な態度を培います。また、自然の中での素朴な生活や活動は、向上心や創造力を育むことにつながり、キャンプで得た知識や技術は、危険を回避し安全を確保する能力、自らの安全は自らが守るという意識を高めます。

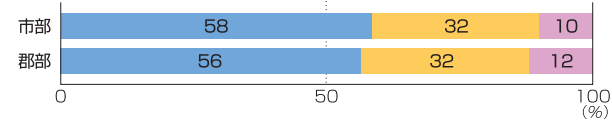
新しい体験が もたらしてくれる学び

キャンプの体験は普段味わうことのできない新鮮な感動をとまもいます。そのためこれまで気が付かなかった自己の長所や能力を発見し、短所を知る機会となります。そして、自然を活用した楽しく新鮮な活動は、生涯にわたって余暇活動を行うための新たな興味・関心を喚起し、健全で豊かなライフスタイルの形成にも役立ちます。

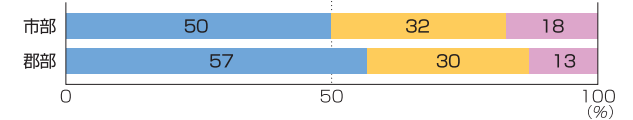
自然体験が少ないのは都会の子どもだけじゃない!?

このデータは、青少年教育活動研究会が、全国の小学校2・4・6年生と中学校2年生約11,000人を対象に実施した調査(平成11年)の結果の一部です。都市部に住んでいる子どもと、地方に住んでいる子どもが、それぞれ自然体験をどれくらいしたことがあるかを調べたものですが、結果を見ると、都市部の子どもも地方の子どもも「ほとんどない」と回答した頻度に大きな違いがないことがわかります。自然体験が少ないのは、都会の子どもだけではありません。自然に囲まれて暮らしている地方の子どもも、都会の子どもと同じくらい自然体験が希薄になっています。

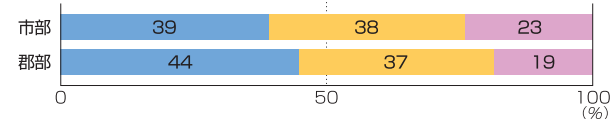
■海や川で泳いだこと



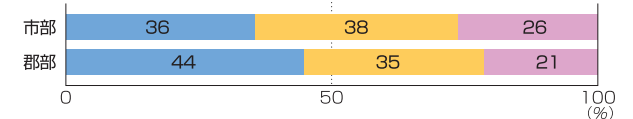
■チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと



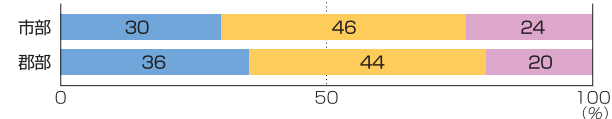
■海や川で貝を取ったり、魚を釣ったりしたこと



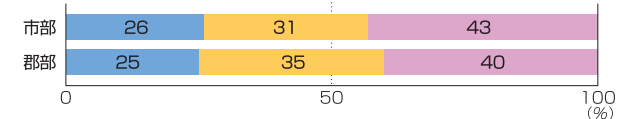
■野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと



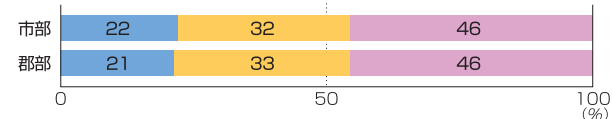
■夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと



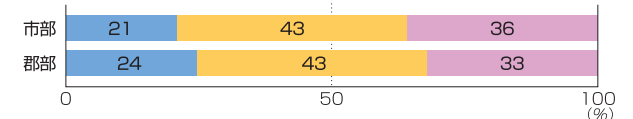
■キャンプをしたこと



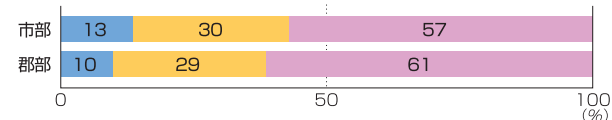
■大きな木に登ったこと



■太陽が昇るところや沈むところを見たこと



■ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと



言葉の解説

「組織キャンプ」

家族や仲間どうしが楽しみで行う「レクリエーションキャンプ」に対してこの言葉があります。教育的な目的で行われることが多いので「教育キャンプ」と呼ばれることもあります。日本では、ボーイスカウトやYMCAなどの社会教育団体が行ってきた歴史があります。基本的には「社会的に責任のある組織、団体が何らかの教育的意図、目的を掲げ、その目的が効果的に達成できるように十分な計画と準備を行い、計画から実施にいたるプロセスにおいて、キャンプの組織、責任、指導体制を明確にし、キャンパーの正しい把握と理解にもとづいて、プログラムを展開し、それらすべてを統合してよりよく機能しているキャンプのこと」(組織キャンプ研究会)という定義を用いています。なお、組織キャンプという呼称はもともと英文のOrganized Campingの邦訳ですが、ここでいうオーガナイズドという意味は、ある目的を達成するために組織化された(Organized)キャンプという意味です。この10年ほどでキャンプ専門の会社やNPOなどがたくさん設立されています。また、2002年の学校週5日制の導入以降は、スポーツクラブや学習塾もキャンプ活動を取り入れるようになってきました。現在のキャンプは、福祉や医療、子育て支援、スポーツトレーニングなど様々な分野に取り入れられています。

日本キャンプ協会では、1966年の設立以来、組織キャンプを中心に、指導者養成、普及活動に実績を残してきています。

数字で見るキャンプ

キャンプ場数

オートキャンプ場 **3,314**
 行政関係施設 **2,314**
合計 5,628カ所

社会教育調査(2004年調べ)、
 オートキャンプ白書(日本オートキャンプ協会
 2004)の数字を合算したもの

キャンプ人口

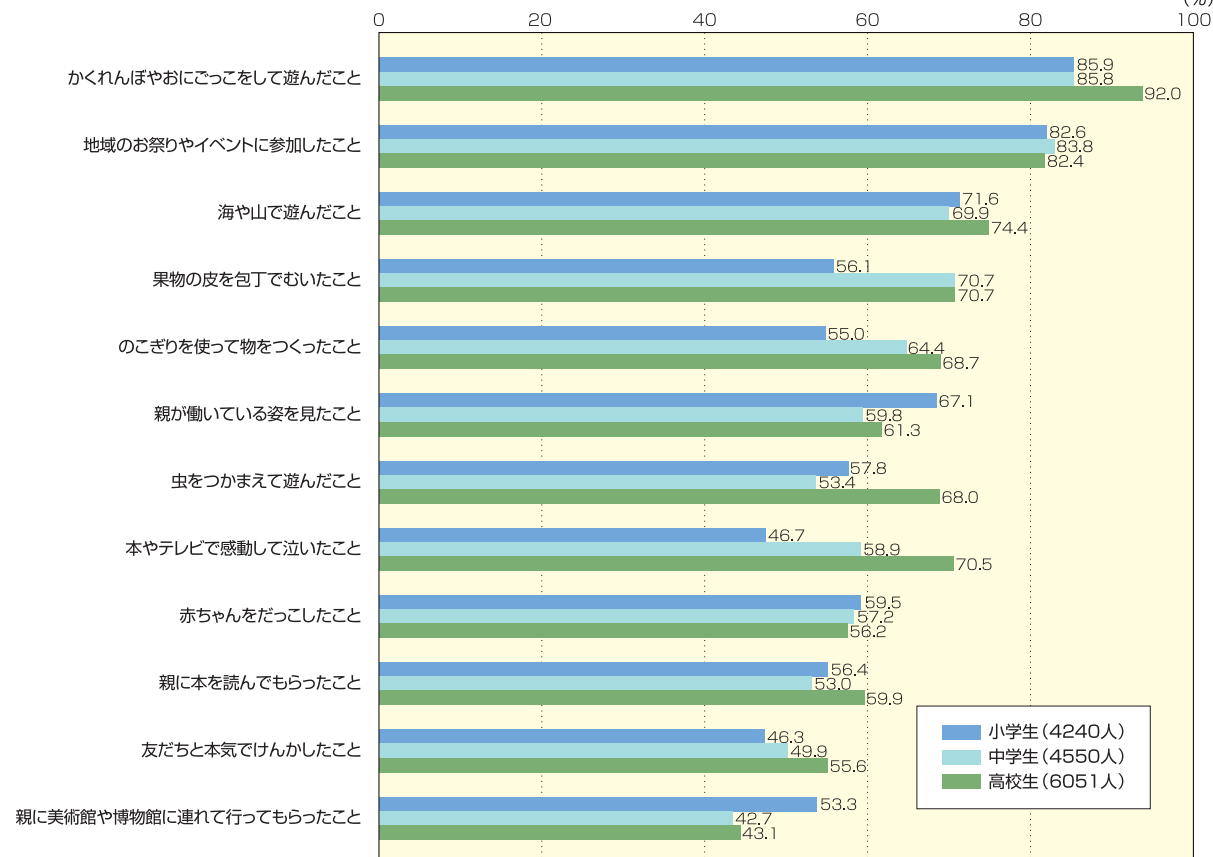
550万人 + α

オートキャンプ人口(550万人)に、学校や
 社会教育団体で行われている自然体験の
 参加者を加えたものがキャンプ人口と
 とらえます。
 (まだ正確な数字を得ていません)

今どきの子どもたちの体験は...

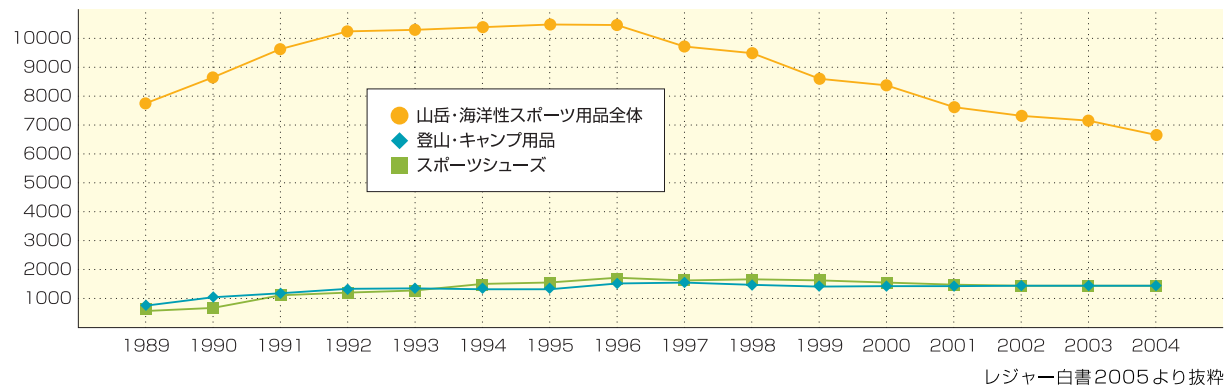
■今までの経験(学校段階別)

※「たくさんあった」+「ときどきあった」の%
 (%)

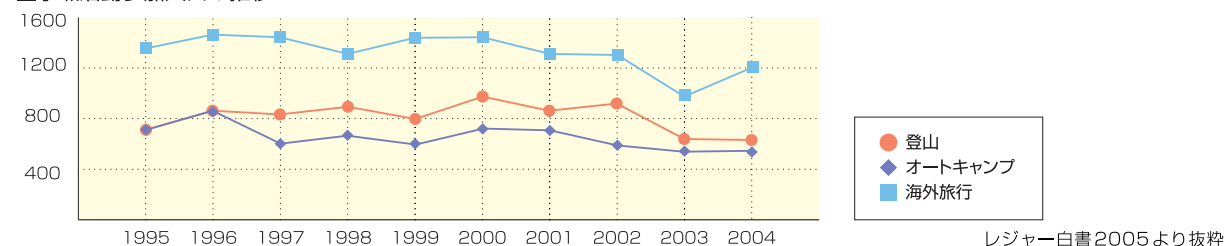


第1回子ども生活実態基本調査(2005) ベネッセ教育研究開発センターより抜粋

■余暇市場の推移 —スポーツ部門—



■余暇活動参加人口の推移



■死亡数、性・死因(外因・死因基本分類)別人数

	男	女	合計
毒ヘビ及び毒トカゲとの接触	2	6	8
スズメバチ、ジガバチ及びミツバチとの接触	22	2	24

毒ヘビよりも
ハチの被害
の方が多い

水辺の活動で
溺れる事故が
たくさん報告
されています。
要注意!

■不慮の事故の種類別に見た年次別死亡数

	死亡数					
	1998	1999	2000	2001	2002	2003
交通事故	15,147	13,111	12,857	12,378	11,743	10,913
自然の水域内での及び自然の水域への転倒による溺死及び溺水	1,413	1,591	1,492	1,409	1,365	1,267

人口動態調査(2003)より抜粋

登山キャンプ用品の市場調査、オートキャンプの参加人口をみると、数年前のブーム時よりも落ちてきているようです。ただし、この統計のレポートをみるとオートキャンプでは初心者が減ってきて、多彩なプログラムを求める傾向があること、子ども向けキャンプに人気があるそうです。今後はキャンプのサービス内容(ソフト面)を充実させていく必要があるのでしょうか。

子どもの生活実態報告によると、思ったより子ども達は遊びの経験があるように見えます。しかし、あえて批判的にみるならば「のこぎりを使って・・・」「本やテレビで感動・・・」「友だちと本気でけんか・・・」の項目を除いて、小中高校という成長の間に経験が増えていない点が気になります。今の子ども達は9才頃から成長が止まっているという意見がありますが、それは経験の停滞と関係があるのかもしれませんが、原因の一つとして、中学・高校と受験勉強が忙しくなり実体験を積む時間が少なくなることが考えられます。

キャンプインフォメーションセンター報告でも幼児や小学校低学年に対するキャンプの問い合わせが多くなってきていて、キャンプの参加者は低年齢化の傾向があるそうです。しかし、このデータから考えるとむしろ中学高校の時期になっても、その年齢なりの体験を重ねることができるキャンプが必要といえるのではないのでしょうか。もっと広い視野でいえば、キャンプは幼児から高齢者までずっと継続して行う価値があるものだと思います。

青少年の自然体験活動について

① 子ども調査編

子どもたちは、けっこう夏には海や川での活動をやっているが、学年が上がるにつれて自然体験は減少している。

あなたは今年の4月から9月までに、学校の授業や行事以外で、次のことをそれぞれの位しましたか？

(a) 山登りやハイキング、オリエンテーリングやウォークラリー

	小学校4年生			小学校5年生			小学校6年生			中学校2年生			高校2年生		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
何度もした (%)	7.2	8	6.3	7	7.5	6.6	5.8	6.1	5.4	3.6	4.6	2.5	2.9	3.8	2.1
少しした (%)	35.7	36.3	35.1	38.5	38.7	38.3	34.1	34.5	33.7	23.3	25.9	20.6	15.3	16.1	14.4
しなかった (%)	56.4	55	57.8	53.9	53.2	54.6	59.6	58.9	60.4	73	69.4	76.7	81.6	80	83.2
不明 (%)	0.7	0.7	0.7	0.5	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.1	0.1	0.1	0.2	0.1	0.3
回答者数 (人)	5,376	2,680	2,695	5,548	2,815	2,728	5,831	2,932	2,899	4,568	2,352	2,214	5,372	2,578	2,788

(b) 海や川で泳いだり、ボート・カヌー・ヨットに乗ること

	小学校4年生			小学校5年生			小学校6年生			中学校2年生			高校2年生		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
何度もした (%)	20.1	20.5	19.8	19.3	21.5	17	17	17.6	16.4	12	15.9	7.9	7.9	9.5	6.4
少しした (%)	45.5	43.6	47.4	42.8	42.2	43.5	39	39.6	38.5	29.6	32.2	26.8	23.3	25.6	21.2
しなかった (%)	33.5	35	32.1	37.4	35.7	39	43.5	42.3	44.7	58.3	51.8	65.1	68.7	64.6	72.4
不明 (%)	0.8	0.9	0.8	0.6	0.6	0.5	0.4	0.5	0.4	0.1	0.1	0.2	0.1	0.2	0
回答者数 (人)	5,376	2,680	2,695	5,548	2,815	2,728	5,831	2,932	2,899	4,568	2,352	2,214	5,372	2,578	2,788

(c) 野外で食事を作ったり、テントに泊まったりすること

	小学校4年生			小学校5年生			小学校6年生			中学校2年生			高校2年生		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
何度もした (%)	11.1	11.7	10.4	9.3	9.7	8.8	8	8.4	7.5	5.6	6.3	4.9	3.8	5.1	2.6
少しした (%)	32.6	34.5	30.8	33	33.9	32.1	29.3	31.5	27.1	19.8	21	18.5	16.7	17.2	16.2
しなかった (%)	55.6	52.8	58.3	57.1	55.7	58.5	62.4	59.7	65	74.4	72.5	76.5	79.3	77.5	81.1
不明 (%)	0.7	0.9	0.5	0.7	0.8	0.6	0.4	0.4	0.4	0.2	0.3	0.2	0.2	0.3	0
回答者数 (人)	5,376	2,680	2,695	5,548	2,815	2,728	5,831	2,932	2,899	4,568	2,352	2,214	5,372	2,578	2,788

(d) 昆虫や水辺の生物を捕まえること

	小学校4年生			小学校5年生			小学校6年生			中学校2年生			高校2年生		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
何度もした (%)	32.8	43.4	22.3	25.9	35.9	15.7	18.9	25.7	12	9.1	13.6	4.4	4.6	6.8	2.6
少しした (%)	36.8	35.6	38	35.9	37.1	34.8	33.8	37.1	30.6	20	24.5	15.3	11.4	13.7	9.3
しなかった (%)	30.1	20.7	39.6	37.8	26.7	49.3	47.1	37	57.2	70.8	61.8	80.3	83.9	79.4	88
不明 (%)	0.2	0.3	0.1	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.3	0.1	0.1	0	0.1	0.2	0
回答者数 (人)	5,376	2,680	2,695	5,548	2,815	2,728	5,831	2,932	2,899	4,568	2,352	2,214	5,372	2,578	2,788

自然体験に関する17項目の調査から4項目をピックアップした全ての活動において、学年が上がるに従ってその活動を行う機会が減っている傾向にある。これらの結果については、①野外で活動する機会そのものが減ってきた。②野外での活動の他、興味・関心のある分野が増えたなど、様々な理由が考えられる。

2

あなたはふだんの生活で、これまでに次のようなことがどれくらいありましたか？

(a) お父さんやお母さんからほめられて、うれしかったこと

	小学校4年生			小学校5年生			小学校6年生			中学校2年生			高校2年生		
	全体	男子	合計	全体	男子	合計	全体	男子	合計	全体	男子	合計	全体	男子	合計
何度もした (%)	48.6	42.2	55	44.6	37.9	51.4	40.3	34.8	45.9	24.9	17.8	32.5	29.3	20	37.9
少しある (%)	36.5	38.8	34.3	39.2	42.1	36.1	39.1	40.7	37.6	42.8	41.4	44.6	41.8	43	40.6
あまりない (%)	10.6	13	8.2	11.9	14.4	9.3	15.4	17.9	12.8	22	27	16.7	21.2	26	16.7
ない (%)	3.2	4.7	1.6	2.7	3.7	1.7	3.4	4.7	2.1	9.3	12.9	5.4	6.8	9.8	4.1
不明 (%)	1.1	1.3	0.9	1.6	1.9	1.4	1.7	1.8	1.6	1	1.2	0.8	0.9	1.2	0.6
回答者数 (人)	5,376	2,680	2,695	5,548	2,815	2,728	5,831	2,932	2,899	4,568	2,352	2,214	5,372	2,578	2,788

(b) みんなといっしょに何かをなしとげたり、作りあげて、一体感を味わったこと

	小学校4年生			小学校5年生			小学校6年生			中学校2年生			高校2年生		
	全体	男子	合計	全体	男子	合計	全体	男子	合計	全体	男子	合計	全体	男子	合計
何度もした (%)	20.4	19.8	21.1	21.3	19.4	23.2	24.9	23.7	26.1	26.3	18.3	34.7	41.4	32	49.5
少しある (%)	36.5	33.5	39.4	40.7	39.3	42.1	41.4	38.8	44	38.1	35.5	40.9	38.1	40.1	36.1
あまりない (%)	25.8	25.2	26.4	24	23.3	24.8	22	22.8	21.7	23.1	27.9	18	14.4	18.9	10.3
ない (%)	16.2	20.3	12.1	12.3	16	8.4	9.9	13.4	6.4	11.3	16.7	5.6	5.3	7.6	3.2
不明 (%)	1.1	1.2	1	1.7	2.1	1.4	1.8	1.9	1.6	1.2	1.6	0.8	1.1	1.4	0.8
回答者数 (人)	5,376	2,680	2,695	5,548	2,815	2,728	5,831	2,932	2,899	4,568	2,352	2,214	5,372	2,578	2,788

「お父さんやお母さんからほめられて、うれしかったこと」については、約8割が「何度もした」「少しある」と答えている。「みんなといっしょに何かをなしとげたり、作りあげて一体感を味わったこと」は年齢が上がるにつれ、その経験が増している。

② 保護者調査編

保護者は、自然の中で子どもどうしが交流し、心身を鍛える活動を期待している。

1

お子さんを自然体験活動に参加させるとしたら、5つの活動のうち、あなたはどの活動に参加させたいと思いますか？

	小学校1年生			小学校2年生			小学校3年生			中学校4年生			中学校5年生			中学校6年生		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
自然の中で心と体を鍛える活動	23.2	25.8	20.5	23.2	25.1	21.3	22.6	24.4	20.7	22.2	24	20.4	22.2	24.8	19.6	22.9	25.5	20.3
自然の中で子どもどうしが交流を深める活動	25.3	23.2	27.6	25.4	25.1	25.9	24.7	23.3	26.2	25.2	24.1	26.3	24.4	23.1	25.7	23.7	22.3	25.1
自然の中で動植物を観察したり、自然の仕組みを学活動	22.6	21.8	23.5	21.1	20.7	21.4	20	19.4	20.8	19.7	19.2	20.3	19.5	18.1	20.9	18.4	16.9	19.9
自然の中でキャンプなど生活技術を学活動	17.5	18.4	16.4	18.5	18.9	18.1	19.7	20.3	19	19.4	19.5	19.3	19.7	21.1	18.4	19.9	21	18.8
自然の中でスキーや乗馬などの技術を習得する活動	4.9	4.7	5.1	5.9	4.9	6.8	6.2	5.9	6.4	6.6	6.4	6.7	7.2	5.9	8.5	7.9	6.5	9.4
不明	6.5	6.1	7	6	5.3	6.6	6.8	6.7	6.9	6.9	6.8	6.9	7	7	6.9	7.1	7.9	6.4
回答者数	5,218	2,648	2,555	5,301	2,663	2,613	5,032	2,573	2,450	5,383	2,685	2,698	5,479	2,774	2,705	5,762	2,878	2,884

どの学年も、全体的に見ると「自然の中で子どもどうしが交流を深める活動」「自然の中で心と体をきたえる活動」の順に参加させたいと考えている者が多い。

独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター実施の「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」(2005.10)よりデータを抜粋

このデータは、全国の小中高校生と保護者に対して、「自然体験活動」に関して2度にわたって調査をしたものです。回答者の延べ人数は、小中高校生約53,500人(うち2度とも回答した人数は約24,000人)、保護者約62,000人(うち2度とも回答した人数は約2万7千人)です。

キャンプなど自然体験活動では感動したり、うれしかったり、達成感を味わう機会がたくさんあると思います。水のきれいさに感動したり、友だちの優しさに感動したり、その場面は様々ではありますが、心が動くことにより新たな成長が得られることもあります。自然体験活動を通じて、感動する機会を幼い頃からたくさん作って行けると良いと思います。

キャンプ なるほど データ

キャンプは、自然環境、活動内容、指導者、仲間などのさまざまな影響を受けて、心身の成長や健康にとってもよい効果があることがわかってきました。そこで、いくつかの研究からわかってきた「なるほど」の発見について紹介します。

やりっぱなしじゃ終わらない ～ふりかえりの効果をさぐる～

今回はキャンプの「ふりかえり」について面白いデータを紹介します。「ふりかえり」という言葉をきいたことがありますか。これは、キャンプでおきた様々な体験を、体験しただけでは終わらずに、その意味を解釈し、次の体験へとより好ましい態度や行動を選択していく、体験学習法の中のとても大切な学習過程のことです。実は、私たちの日頃の学習の多くは、自然とこの体験学習をしています。キャンプが高い学習効果を上げるのも、この体験学習法が大きく関係しています。

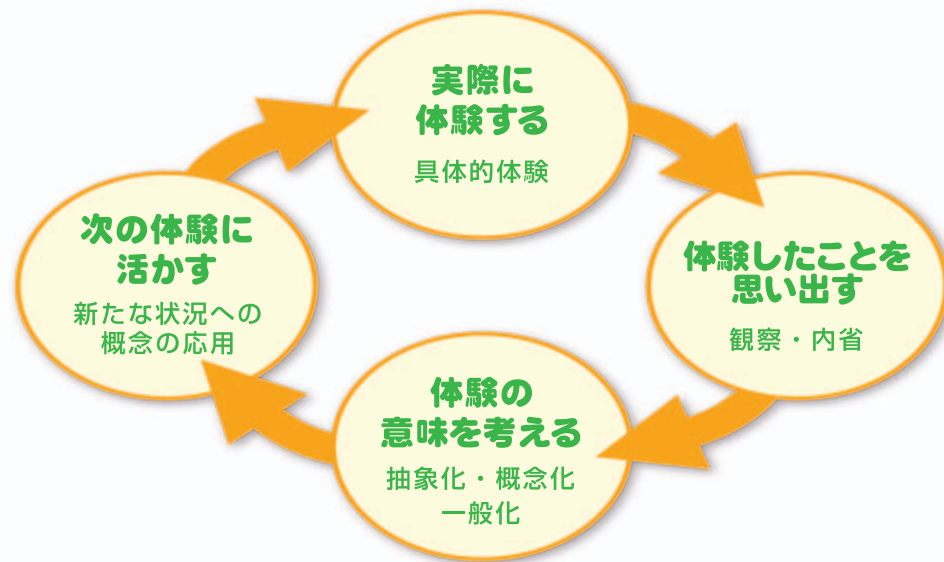


図1 体験学習サイクル

具体的な体験とはグループまたは個人でひとつの目標に向けて実際に活動する段階です。次に、観察・内省の段階とは、活動の過程に目を向け、体験の意味を分析する段階です。抽象化・概念化の段階では、分析結果に基づき、体験から得られた学習内容を特定します。最後の応用の段階では、過去の体験から得られた学習をもとに、新たな状況に向けて、より望ましい方法を計画します。

出典：Experiential learning, Kolb, A. David, Prentice-Hall (米)。

体験とふりかえりのバランスが大切

大学生30名を対象に、仲間づくりを目的とした1日の野外ゲームのプログラムを行いました。ちょうど半分の2班15名は、活動中にふりかえりを導入した指導を行いました。もう一方の2班15名には、野外ゲームだけを連続して行いました。ふりかえりでは、野外ゲーム中のメンバーの関わり方や、これからどうすればグループがよりよくなるか、野外ゲームでの体験を学校でどうかすかについて、メンバーどうして話し合いました。その結果、実際の自然体験や、ゲームを達成したり、メンバーと協力したりする体験に差はありませんでした。さらに、ふりかえりを行った班は、ふりかえりを行わなかった班に比べて、平均2.0行うゲーム少なくなっていました。ところが、ふりかえりを行った班は、自分やメン

バーについて考えたり、過去や未来の出来事について考えたりする機会が多いことがわかりました。また、全体的なプログラムの評価でも、ふりかえりを行った班の方が、自分のリーダーシップスキルとコミュニケーションスキルについて、新たな発見があったと高い評価をしていました。この結果は、体験だけでなく、実際の学習に必ずしもつながらないことを意味しています。せっかくキャンプに行ったのだから、ついついたくさんの活動をした気持ちもありますが、活動中の出来事や問題点をみんなで話し合ったり、次の活動に向けてよりよい方法をみんなで相談したりするようなゆったりした時間も必要ということですね。

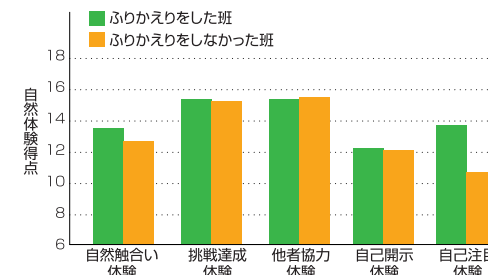


図2 野外ゲーム中の自然体験の比較

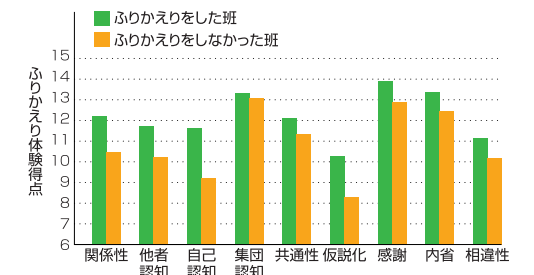


図3 野外ゲーム中のふりかえり体験の比較

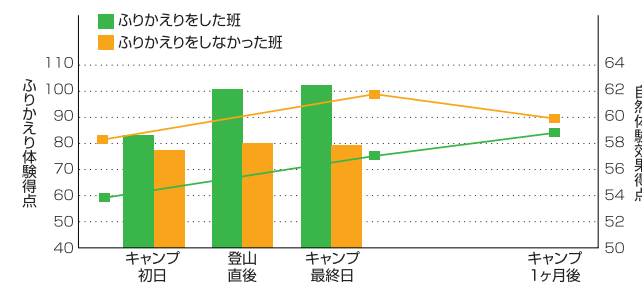
図2のうち自己注目体験のみに統計上意味のある差が認められました。一方、図3では、すべてのカテゴリーでふりかえりを行った班が高かったのですが、メンバーのつながりに関する関係性、メンバーについて考える他者認知、自分について考える自己認知、今後について考える仮説化、メンバーに対する感謝、過去の出来事をふりかえる内省について、統計上意味のある差が認められました。

出典：ふりかえり活動を導入したASEが参加者の学習効果に及ぼす影響、奈良教育大学卒業論文、正垣翔（奈良教育大学）調査

ふりかえりはキャンプと日常をつなぐ架け橋

5泊6日のキャンプに参加した大学生14名を対象に、同じようなふりかえりの効果について調査しました。1班7名には、キャンプの始まり、1泊2日の登山の直後、キャンプ最終日に、それぞれ1時間程度、ふりかえりの時間をつくりました。キャンプの最初には、キャンプの班の約束ごとと目標設定、登山直後には登山の感想、キャンプ最終日には、キャンプでの学びを日常でどう活かせるかという内容で指導しました。もう一方のグループは、ふりかえりとは全く関係ない活動を行いました。その結果、キャンプ初日のふりかえりではあまり差は見られませんが、登山直後とキャンプ最終日のふりかえりでは、ふりかえりの程度に大きな差がみられました。このことから、グループで目標達成をした直後や、これから日常にもどるキャンプの終了直前は、ふりかえりをするのに

適したタイミングであることがわかりました。また、リーダーシップ、コミュニケーションスキル、自己成長などを含む自然体験効果は、キャンプ直後では、いずれの群も向上しましたが、キャンプ一ヶ月後では、ふりかえりをおこなわなかった群がまたもとにもどってしまったのに対し、ふりかえりを行った群は、そのまま維持されました。キャンプでは、仲間どうして協力して、様々な困難や課題を克服し、日常では得られなかった達成感や満足感を得ることができます。その結果、上述したような能力が身に付くことがわかっています。しかしながら、これらの学習が日常場面に活かされてこそ、キャンプにほんとうの意味で教育的効果があったといえます。ふりかえりは、キャンプ体験と日常をつなぐ手助けをしてくれるのかもしれない。



出典：冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響、奈良教育大学修士論文、荒木恵理（奈良教育大学大学院）調査

こんなキャンプ あります。

— ユニークなキャンプを紹介します。 —

非行少年のキャンプ

今日、青少年の凶悪な犯罪や非行が大きな社会的問題となっています。犯罪や非行を予防することと同時に、非行を犯した少年達の立ち直りをいかに援助してゆくかということが課題となっています。このような問題の予防や援助策の一つとして、キャンプも貢献しています。

非行少年のキャンプは、1960年代頃よりアメリカにおいて始まりました。当時の導入の理由は、罪を犯した少年たちを安易に施設に収容し犯罪者としてのレッテルを貼ることへの批判や施設収容では多大な費用がかかるということからでした。アメリカでは、現在でも多くのキャンプが非行少年の処遇のために開設されています。このことは、非行少年へのキャンプが一定の成果をあげていることを裏付けているからだと思います。

日本でも、このようなキャンプを利用した非行少年への試みが実践されています。意外にその歴史は古く、家庭裁判所では、1970年代には合宿キャンプが導入されていました。当時は、増加の一途をたどっていた交通非行の少年の保護的処置として実施されていました。現在では、神戸、長野、東京、山口、大阪などの家庭裁判所において試験観察として2泊3日程度のキャンプが導入されているとの報告があります。少年達の処分を保留したまま、キャンプに参加させることで、少しでも立ち直りを援助することがねらいとされています。

また、未だ数は多くありませんが、社会教育施設においても非行や怠学傾向のある少年達の教育・再教育の場として長期のキャンプが実施されている事例があります。さらに、少年院等の処遇として体験的なゲームが導入されている事例もあります。いずれも、ある程度の成果をあげているようです。今後、少年院や自立支援施設等の施設が民営化の流れにあると言われており、キャンプへの期待がますます高まるものと思われます。



ぼくのようちえんは森のなか — 「森のようちえん」

デンマークには、園舎を持たず、一日中、一年中森の中で過ごす「森のようちえん」があります。晴れの日も、雨の日も、雪の日も子どもたちは森へと集まります。

3歳児から5歳児の異年齢の子どもたちが一緒に森の中をお散歩します。歩く距離は、4キロから6キロ。泣く子や駄々をこねる子はいません。お弁当も毎日森の中で食べます。雨の日には、葉の多い木の下で、晴れている日は、青空の下でお日さまを浴びながら。歩きながら、おもしろい物に出会い、遊びが始まります。急な上り坂は、みんなで手を貸しあいます。森の中で出会うものすべてが、子どもたちの遊び道具で、想像力を膨らませてくれます。おもちゃも遊具もないかわりに森の中すべてのものが子どもたちの発想と興味によって、子どもたちを育て、楽しませてくれます。

森のようちえんの先生たちは、子どもたちの十分な時間を用意し、できる限りのことは子どもたちに任せます。着替えも、3歳の子どもが自分でやります。靴は紐靴のトレッキングシューズです。これも自分で履きます。歩く列の先頭も子どもたちに任せます。待合場所が決まっています。そこにいったら、後ろの子どもたちが来るまで待ってようという約束があるだけです。自分たちのペースでたくさんの寄り道をしながら列は進みます。子どもたちの自立と想像力を十分に膨らませる大切な時期と考え、待つ姿勢と遊びの中にも介入しない、子どもたちの世界を大切にしている姿勢があります。「これはだめ」「もう時間だから終わり」といった言葉はありません。

これは、毎日の継続の中で育てている子どもたちの力と先生たちの信じる心があるてはじめて成り立つ森のようちえんの姿です。そして、森がもつ教育力が加わります。子どもたちが生まれながらにそなえもっている力を十分に引き出される素敵な「森のようちえん」。わたしは、もし子どもに戻れたら、「森のようちえん」に通いたいな—と思います。このような試みは、日本でも始まっています。

文 小菅江美 (こすげえみ)

1971年生まれ。新潟県上越市在住。環境教育事務所lifetime代表、NPO法人緑とくらしの学校理事を務める。2004年1月にデンマーク・スウェーデンの森のようちえんを視察。日本へ持ち帰り、森のようちえん「てくてく」を展開中。

森のようちえんレポートは、<http://www.10.ocn.ne.jp/~lifetime/>
森のようちえん「てくてく」の活動は、<http://green-life.cocolog-nifty.com/greenlife/> でご覧いただけます。



手を貸しあい、何度も転びながら上り坂をのぼりきる3歳の子どもたち



全身土だらけになって、動物になりきりすみかの中で遊ぶ子ども

キャンプ・インフォメーションセンターから

2005年1月から2005年10月の相談内訳

相談内容のベスト5

- | | |
|---|-----|
| ① 情報提供(プログラムの相談)
(雷の危険について、葉っぱで作る
バッタの作り方、野外生活技術など) | 30% |
| ② 指導者紹介依頼 | 16% |
| ③ キャンプ場紹介 | 14% |
| ④ 子どもが参加できるキャンプの紹介 | 13% |
| ⑤ 指導者資格についての問い合わせ | 12% |

保護者が「キャンプ」を選ぶ時の4つの条件

— コーディネーターが相談時、保護者からよくたずねられたベスト4 —

- ① 集合、解散が自宅の近く、または交通の便が良い場所である。
- ② 兄弟を一緒に出すことが可能な程度の料金設定である。
- ③ 子どもが興味を持ちやすい(活動をイメージしやすい)プログラムが企画されている。(昆虫採集、川遊び)
- ④ 信頼性のある団体である。
(有資格者が指導している。実績がある。安全対策がしっかり取られている。)

日本キャンプ協会が考える「よりよいキャンプ」7つの条件

- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| 1. 個人の成長の場であること | 5. からだもこころも安全であること |
| 2. 一人ひとりが尊重され、受け入れられる場であること | 6. すべての人々に開かれた場であること |
| 3. 自然と人とのかかわりあいを知る場であること | 7. 楽しい場であること |
| 4. 人とのかかわりを通して社会を学ぶ場であること | |

※これは、組織キャンプ、レクリエーションキャンプどちらにも共通することです。

社団法人日本キャンプ協会では、キャンプのことなら何でも相談に応じる「キャンプインフォメーションセンター」を開設しています。2005年の相談実績から、キャンプの傾向を見てみましょう。



▶▶▶ 2005年のインフォメーションセンターをふりかえる

昨年に比べると『子どもが参加できるキャンプの紹介』の割合が減ってきました。これは、参加者の需要が減ってきたわけではなく、インターネット等の普及によって、情報を手にしやすくなったからのようです。日本キャンプ協会のホームページ「キャンプ検索」で情報を得ることができますが、このページの利用が増えています。一方で『情報提供』、『指導者紹介依頼』が増えたことを見ますと、日本キャンプ協会のもつ野外のノウハウが広く社会で活用されるようになってきたように考えられます。ここ数年、自然災害による事故が多く、2005年は「雷」や「ハチ」などのキャンプでの安全面に関する事、ライフラインが断たれてしまった時の野外生活技術など、「こんなときどうする?」的な具体的な質問が多かったことが今年の特徴でした。

▶▶▶ その他、キャンプをとりまく状況

- ▶ 夏休みが短縮化の傾向にある (東京・横浜など)
- ▶ キャンプカウンセラーをつとめる大学生の夏休みの開始が遅くなり(8月から)、指導者が不足気味
- ▶ 「子どもの居場所づくり事業」(文部科学省)、「週末子どもクラブ」(日本キャンプ協会)のように、夏休みだけでなく週末や連休を活用した取り組みが多くなってきました。

(キャンプインフォメーションセンターコーディネーター 高瀬宏樹、山田紗也子)

■ キャンプインフォメーションセンターへのお問い合わせは

Eメールで …… info@camping.or.jp

電話で …… 03-3469-0233 (月~金/10:00~18:00)

FAXで …… 03-3469-0504

手紙で …… 〒151-0052
東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内

専門のコーディネーターがお答えいたします。

良いキャンプには良い指導者が必要です

日本キャンプ協会では、公認指導者の養成をしています。それは、質の高いキャンプ経験のためには、指導者が不可欠だからです。資格を持っている指導者は、全国に約2万人。全国のようなアウトドアのシーンで指導者は活躍しています。



あとがき

この冊子は、2005年のキャンプに関するデータを収録したものです。

「キャンプ」といってもその内容は広く、深く、さまざまなキャンプが全国で行われています。

この冊子が、キャンプのことをより知っていただくための一助になることを願っています。

都道府県別指導者数

ベスト5	
1. 東京都	4,845 名
2. 愛知県	1,303 名
3. 埼玉県	1,279 名
4. 大阪府	1,024 名
5. 神奈川県	983 名
1県あたり平均	427 名

※ 各県協会に所属する指導者数を表しています

指導者の年齢構成

10代～20代	71 %
30代	11 %
40代	7 %
50代	7 %
60代	3 %
70代以上	1 %

資格別会員数

キャンプ・ディレクター1級	1,213 名
キャンプ・ディレクター2級	2,800 名
キャンプ・インストラクター	14,292 名
合計	18,305 名

※ キャンプ・インストラクターは、20時間、ディレクター2級は80時間、ディレクター1級は160時間の研修を修了した指導者です。

登録指導者の男女比

女性	47 %
男性	53 %

Camp Data Book 2005

2006年1月30日発行

編集 社団法人日本キャンプ協会 調査研究委員会
平野吉直 大石示朗 井上忠夫 小泉紀雄 坂本昭裕 多田聡
岡村泰斗 月橋春美 高瀬宏樹

発行者 酒井哲雄

発行所 社団法人日本キャンプ協会

〒151-0052

東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立青少年センター内

TEL 03-3469-0217 FAX 03-3469-0504

E-mail : ncaj@camping.or.jp

http://www.camping.or.jp

印刷 大日本印刷株式会社

発行 10,000部



NCAJ

National Camping Association of Japan